

借りている高校の国語の教科書を読んでいると、「原田マハ」の作品に出合った。何だかほっとした。それまでは、頭をフル回転させて読み、どっと疲れていた。原田マハならば、安心できる。その作風も、美術を題材にしたストーリーであることも容易に想像できた。

その教科書には、「砂に埋もれたル・コルビュジエ」というタイトルがあった。読んだことがない。少しばかりのワクワク感と期待感をもって、読み始めた。やっぱり、原田マハだった。気軽に、どんどん読めるのだが、意外な展開があり、奥が深く、考えさせられる。そして、読後感がよい。いつもの原田マハである。

原田マハは、2005年に作家としてデビューした。それまでは、アート、美術に関わる様々な仕事を経験している。1993年から東京六本木の森美術館の設立に携わり、ニューヨーク近代美術館にも派遣されて勤務している。こうした職業的な経験を生かして、芸術を題材とした小説を数多く執筆している。

私が、原田マハの作品と出合ったのは、「本日は、お日柄もよく」が最初だった。おもしろかった。久しぶりに、作品の世界に引き込まれた。一気に読み進めた。この本からは、自分の仕事に関わるアドバイスのようなものもいただいた。大きな出会いだった。「楽園のカンヴァス」もよかった。ぐいぐいと読ませてくれる。「太陽の棘」もおもしろかった。どの作品にも、原田マハが流れている。そう思う。

高校生が、これらの作品を読めば、小説の魅力やおもしろさに気づくはずである。「砂に埋もれたル・コルビュジエ」は、この教科書において、そういった役目を果たしているように思う。この教科書には、芥川龍之介の「羅生門」、夏目漱石の「夢十夜」、志賀直哉の「城の崎にて」も収められている。いずれも日本の文豪の作品である。これらの作品と、原田マハの作品を比べると、時代の違いはあれど、小説という一つのスタイルがもたらす魅力やおもしろさ、そして価値がわかる。

ル・コルビュジエという名前は知っていた。有名な建築家であることも認識していた。そのコルビュジエが、砂に埋もれている。題名にも興味をそそられる。原田マハさんは、私よりも年下かと勝手に思っていた。予想は外れ、2つ上だった。ほぼ、同年代ということになる。それだけで、うれしくなるから不思議である。

高校生から借りた国語の教科書を、今までとは全く違った角度、視点から読んでいる。改めて、感謝である。また、原田マハさんの作品を読みたくなった。